

同志社大学

2018 年度卒業論文

論題 若者におけるロック音楽の役割

社会学部社会学科
学籍番号：19151002
氏名：荒田 留花
指導教員：立木茂雄

本文総文字数 23,514 字

要旨

論題 若者におけるロック音楽の役割

学籍番号：19151002

氏名：荒田 留花

本稿は、若者におけるロック音楽の役割をテーマに、ロック音楽を学校生活との関連においてまとめた論文である。一般的にロックといえばどのようなイメージを持つだろうか。多くのライブが行われるライブハウスは少し閉鎖的であるし、服装や髪型に対する許容範囲も大きいので、危険で近寄りがたいイメージを持つ人が多いように思う。しかし、近年行われた調査によればロックファンには自尊心の低い人が多いことがわかった。ただし、この調査における相関は低く、さらなる調査が必要である。そこで、インタビュー調査をもとにロックファンに見られる共通性と音楽の受容について分析した。その結果、ロックファンは周囲の視線に敏感で自尊心の低い人が多く、その性格は学校生活における対人関係での疎外の経験に由来することがわかった。また、彼らは音楽によって不満を解消するのみならず、疎外によって生じた落ち込みを軽減させ、主体的に行動するようになっていた。したがって、消極的な彼らにとってロック音楽は、失われた積極性を取り戻すための希望であると言える。

[キーワード] 自尊心の低さ、対人関係における疎外の経験、下層としての位置づけ

目次

1. はじめに.....	1
2. ロック音楽の〈場〉.....	2
3. 日本におけるロック音楽の歴史.....	3
3.1 フジロックフェス以前.....	4
3.2 フジロックフェス以降.....	5
4. 欧米の文献から見るロック音楽のファン層.....	6
5. インタビュー調査.....	8
5.1 調査概要.....	8
5.2 結果と分析.....	9
(1) ロックファンに見られる共通性.....	9
(2) ロックファンによる音楽の受容.....	16
6. おわりに.....	21
謝辞.....	22
文献.....	23
付録.....	25

1 はじめに

本稿は、若者におけるロック音楽の役割について、ファンへのインタビュー調査をもとに学校生活との関連から分析したものである。一般的にロックというどのようなイメージを持つだろうか。危険で近寄りがたいものだろうか、それともかっこいいものだろうか。筆者にとって最初のロック音楽は GLAY であった。母が大の GLAY ファンであり、車内ではいつも GLAY が流れていたし、初期の頃はボーカルが長髪で、ギターやベースにしても奇抜な髪型だったので、ロックとは俗にいう社会の常識から外れることだと思っていた。また、X-JAPAN の、楽器を壊すライブパフォーマンスから、社会の既存意識を壊すことであると考えていた。

だが、近年ロックに対するイメージを刷新するような興味深い研究が発表された。調査者である Adrian North によると、好きな音楽ジャンルと個人の性格には関連があり、調査の結果、ロックファンには自尊心が低く外向的でもないが、穏やかで親しみやすい人が多いことがわかった。今まで抱いていたロックに対するイメージとは対照的である。たしかに、筆者自身もバンドのライブを見るために何度もライブハウスに足を運んでいるが、その場に来るファンは派手というよりは大人しめの人が多いように感じる。服装もそのまま大学にも行けるような普段着であり、特殊な髪色や服装をした方に出会うことが少ない。ファンに共通性があるのも納得できる。また、自尊心の低さについて言えば、自尊心と学校との関連性について述べられた文献が存在する。豊泉周治は、日本では小学生から中学生にかけて自尊心が低下し続けているのに対し、オランダの日本人学校の小中学生とオランダの小中学生の自尊心はあまり変わらないという古荘純一の調査から、日本における自尊心の低さは学校教育の中で形成され、高じられていくものだと分析した（古荘 2009; 豊泉 2014）。よって、一連の研究から考察すると、日本においてロック音楽ファンに見られる自尊心の低さは、学校生活の中で形成されたものと推察できる。しかし、日本ではロック音楽と学校生活との関連で述べられた研究はほとんどない。そこで、本稿はロック音楽と学校生活をテーマに、どのような人がロック音楽を聴き、音楽から何を得ているのかを分析する。調査方法はインタビューである。インフォーマントは、17 歳から 24 歳の男女 9 名である。大別すれば、ロックファン 7 名とロックに興味のない 2 名である。なお、ロックに関心のない者へのインタビューは、ロックファンへのインタビュー内容と比較し、より詳細な分析を行うために実施した。

本稿の構成は次の通りである。第 2 章ではロック音楽の機能について定義し、第 3 章では日本におけるロック音楽の歴史について概観する。第 4 章では欧米の文献をもとにロック音楽のファン層について述べる。第 5 章ではインタビュー調査について概要を説明し、調査結果を分析する。最後に、本稿の知見をまとめ、今後の課題を記して結論とする。

ロック音楽に関する研究は、アメリカやイギリスといった海外の方が発展していて論文数も多い。日本における研究は、筆者が調べた限りでは 1990 年以降に発表されたものが多く、黎明期と言えるだろう。近年、日本のロックシーンはフェス、ライブハウスの増加でますます盛り上がりを見せている。稚拙ながら本稿はロックシーンを分析する際の一助になればと思い、それを意義として、以下、順を追って説明する。

2 ロック音楽の〈場〉

関心のない人々にとっては様相が全くわからないのがロック音楽である。多くのライブが行われるライブハウスは怪しくて危険な場所であるという漠然としたイメージを持っている人も多い。そこでまずはロック音楽がどのような機能を有しているのか、このことから説明したいと思う。

先行研究として南田勝也の研究が挙げられる（南田 1998）。南田はブルデューの〈場〉の理論を独自解釈した上で援用し、ロック音楽文化の構造を分析した。彼の研究を概観するにあたって、まずはブルデューの理論から説明する。ブルデューは個人の趣味選択が各々の自由な選択によるものではなく、自身が所属する階級の影響を受けていることを文化資本¹⁾・経済資本と慣習行動²⁾から説明した。彼は、これら2つの資本量およびその構造によって決められた各階級と慣習行動を同じ座標平面上に位置付けることによって、階級構造と慣習行動の関連性を明らかにしたのである。その結果、階級は慣習行動に対して一定の影響力を持っていることがわかった。つまり、個人が日常生活で行うあらゆる選択においても階級構造が再生産されていることが明らかになったのである。

この理論を応用し、南田はロックの〈場〉を「文化的正統性という一つの共通の価値を賭けて、その対象に関心＝利害を持つさまざまな人々（演奏者、聴衆、雑誌編集者、レコード会社、学者、批評家……）の総体の間に結ばれる客観的諸関係からなる空間」と定義した（南田 1998: 569）。このような〈場〉では文化資本・経済資本量によって、音楽やその文化様式を「ロック的である」と判断する際の価値基準として主に3つの指標に分別される。これらの指標については簡単に表1にまとめることにする。

第1にアウトサイドである。アウトサイドとは「支配圏や中央圏から抑圧を受けている、あるいは除外されているというアウトサイドの立場に立つことから生産される価値体系の指標」である（南田 1998: 571）。そのため、文化資本、経済資本がともに乏しい場合が多く、社会不正や矛盾に対する訴えとしての役割をロック音楽に求める。第2にアートである。アートとは「既存音楽の解体を目指し、新しい芸術的感動と知的好奇心、超越的な体験をもたらさんとする立場に立つことから生産される価値体系の指標」である（南田 1998: 571）。そのため、経済資本が乏しく文化資本が豊かな場合が多く、平凡な日常からの脱却をロック音楽に求める。第3にエンターテインメントである。エンターテインメントとは「ポピュラー音楽としての位置を守り、娯楽の文脈を尊重し、エンターテイナーとしてのイメージを保全する立場に立つことから生産される価値体系の指標」である（南田 1998: 571）。そのため、経済資本、文化資本の双方を十分に保有している場合が多く、理屈抜きで楽しめるものをロック音楽に求める。このように、ロックの〈場〉内部では、資本量の相違によってロック音楽に対する価値基準も異なり、どれが本物のロックに値するかという文化的正統性を争っているのである。

表1 ロック音楽文化の3つの指標

指標	アウトサイド	アート	エンターテインメント
表現されたものを言葉で言い表した特性の例	反抗 権威への反逆 社会体制への批判 マイノリティ・弱者の立場 根源的な躍動 アマチュアリズム ブルーズの美学 放浪 ドロップアウト	前衛 非日常 暗示 潜在意識 自己の解放 高揚感 精神の飛翔 もっと遠くへ ユートピア	身体で感じること 楽しみ 刺激 セクシャリティ ビジュアル ビート感覚 ドライブ感覚 いさぎよさ にぎやかさ
特性との直接的な意味連関を想起させる表現の仕方例	シャウト、わざと音程を外すような歌い方、騒音、思いもよらないコード変換などの音の伝達 直接的な歌詞における異議申し立て 常識からの逸脱を誇示するようなドラッグなどへの耽溺	複雑な技巧に裏打ちされた実験音楽的手法 単純なリフの延々とした繰り返し 歌詞におけるイメージのコーラージュ レコードのカバー・アート トリップ体験の表現	ロックンロールの態度的特徴を想起させるもの プロフェッショナルな技能に基づく計算されたライブ・パフォーマンス 特徴的なビジュアルやスタイル

出典：南田（1998）より引用

一方で、ロックの〈場〉外部、つまりロック音楽に興味を持っている人と持っていない人はどのように分けられるのだろうか。引き続き南田の研究を引用すれば、ロックの〈場〉の参加者にとってロックとは「経済的・政治的な体制秩序の恩恵から除外されたものとしての『持たざるものの武器』」である（南田 1998: 576）。したがって、破壊行為や体制への反発といった本来なら支配者層から非難されるような不利益な行為に価値を置く。つまり「旧来の正統文化とは対抗的な下方向への誘致」を働きかけるのである。

このように、外部ではロック音楽に対する関心の有無によって社会体制における下層とそうでない者が区別されるのに対し、内部においても資本量によって指向性が弁別されている。よって、ロックの〈場〉についてもブルデューが主張する階級の再生産が行われていることになる。しかし、日本ではこのようなロック音楽の構造に対し、内部での共闘があまり行われなかったために独自の〈場〉が発展することになる。次章では日本におけるロック音楽の歴史をたどりながらどのような〈場〉が形成されるに至ったか説明する。

3 日本におけるロック音楽の歴史

日本におけるロック音楽の歴史には大きな転換点がある。それは 1997 年に開催されたフジロックフェスである。このフェスは日本で初めて行われた大型音楽フェスで、約 20 年経った今でも四大フェスに数えられるほど人気である。しかし、第 1 回目の 1997 年は悪天候に見舞われ運営も不十分であったため史上最悪と評された。当初は失敗に終わったこ

のフェスを区切りに日本におけるロックの〈場〉はどのような発展を遂げたか、フジロックフェス以前と以後に分けて説明する。

3.1 フジロックフェス以前

日本におけるロックシーンの始まりは1960年代にまで遡る。きっかけは1966年ビートルズの来日であり、この来日をきっかけにグループ・サウンズ（GS）ブームが起こった。諸井克英によれば、グループ・サウンズとは1966年から1969年に登場した自分たちで演奏をしながら歌うという音楽グループの形態を指す（諸井 2015）。しかしながら、グループ・サウンズの流行はビートルズのアイドル的側面を模倣したにすぎず、そのため作詞・作曲は専門家の手に委ねられ、売れ線を意識した曲作りであった（南田 2001; 諸井 2015）。その一方で、グループ・サウンズの商業主義に反対して台頭したのがフォークである。大関雅弘によれば、当時は三種の神器が普及し豊かな暮らしへの憧憬が高まる一方で、ベトナム戦争や大学闘争が起こり、資本主義や米国との関係性に対する不安から若者による反体制運動が起こった（大関 2017）。そこで若者たちは、自らが作詞・作曲した歌を歌うことで反戦や社会体制に対する不満を表明した。中でも関西フォークが有名で、その中心人物である岡林信康は、使い捨て労働者の心情や既存社会に反対する若者たちの心情を歌った。このようにフォークは青年の異議申し立てとして機能し、対抗文化としての役割を担っていた（諸井 2015）。

しかし、1970年代になるとその役割は薄らぐようになる。なぜなら連合赤軍事件やオイルショックといった社会の根底を揺るがすような事件が起こり、それに伴って青年の異議申し立て運動も衰退したからである。この頃、流行したのがニューミュージックと呼ばれる音楽ジャンルであり、自身の私生活を表現した歌が流行する。一方で、ロックにおいては矢沢永吉をボーカルとしたバンド、キャロルが一世を風靡した。彼らはリーゼントに革ジャンというスタイルで中～下層者の支持を得た。暴走族が集会を行う可能性があるとして、公演を拒否される問題が起こったほどである。しかし、この一連のブームはキャロルの解散とともに霧散し、ロック文化を定着させるには至らなかった。「低級であること」までが模倣の対象にすぎなかったのである（南田 2001）。

その後、反商業主義であるはずのロックがあえて歌謡曲界に参入することもあったが音楽が商品化されることに耐えられず、マイナーシーンでの活動を徹底化した動きが流行する。これが後にインディーズと呼ばれるバンド活動である。そして、1980年代に入るとライブハウス文化の勃興とともにバンドブームが到来した。しかし、このブームの到来によって多くのアマチュア・バンドが参入し、メジャーシーンでの活躍を目指すようになる（南田 2001）。その結果、ライブハウスはメジャーデビューするための踏み台でしかなくなり、再び商業産業に組み込まれることになってしまった（永井純一 2016）。ロックの〈場〉における基盤の希薄さを露呈することになったのである（南田 2001）。

その後、バンドブームは衰退し音楽産業が制度化された結果、1990年代には、日本の音楽はJ-POPという呼称で呼ばれるようになる。もはや異議申し立てをする必要もなく「日常の延長線上の音楽文化」が残るのみとなった（南田 2001）。このように、ビートルズの来日をきっかけに端を発したロック音楽文化は、グループ・サウンズ、フォーク、ニューミュージック、J-POPと名前を変え、ロックの名のもとに結びつくことはなかった。それ

それに分化して自立的に収束していだけで〈場〉は生まれなかったのである（南田 2001）。

3.2 フジロックフェス以降

1990年代に入り J-POP が登場して以来、ミリオンセラーが続出し、J-POP は音楽産業の主流となりつつあった。その一方で、ライブハウスは収入を確保するために、出演者から出演料を徴収するノルマ制という体系を採用したり、大手資本と結びつくことで徐々に制度化されていった。そのような中で登場したのがフジロックフェスである（永井 2016）。前述したように第 1 回目のフジロックフェスは、悪天候と運営上の混乱があり失敗に終わった。だが、その失敗があったからこそフェスの楽しみ方や規範が再考され、今日のフェスの形態が形成されるに至ったのである。

永井によれば、フェスの特徴として次の 2 点が挙げられる（永井 2016）。第 1 に、個人化の内包である。フェスでは複数のステージが同時進行で行われる。そのため個人の選択によって見たいライブを選ぶことができ、フェスをともに作り上げているような感覚を得られる。この場合、聴衆は傍観者ではなく参加者であると言える。第 2 に、世代感覚との親和性である。当時は就職氷河期ということもあって若者の雇用難が社会問題化していた。非正規雇用率が増加し始めたのもこの時期である。若者たちは学校を卒業し、次の帰属場所となるはずの会社を確保することが難しくなった。社会資本を喪失し、帰属する場所のみならず、その意識すら失っていたのである。この時代の若者たちはロストジェネレーション世代と呼ばれ、一般的に 1970 年から 1982 年生まれを指す。フェスは複数日にわたって開催されることもしばしばあり、屋台が立ち並ぶため食事を楽しむことができたり、中にはキャンプをすることもできる。そこで彼らは音楽という同じ趣味を共有する仲間を見つけたり、フェスという時間と空間を共有することで喪失した帰属感を埋めている。このような若者たちにとってフェスは『場』に頼れない社会を渡っていくための新しいスキルや戦略』になっており、不確定な現在と不安定な自分を肯定できる場所である（永井 2016: 211）。このように、フェスでは主体的な選択とコミュニティの模索から音楽そのものよりは雰囲気を楽しむことが主流となっている。永井によれば、このような音楽の楽しみ方を「軽やかな聴取」「周辺の聴取」という（永井 2016: 53-54）。ノリを重視したこの聴取の仕方は他文献でも確認され、円堂都司昭と南田は「遊び化」として、宮入恭平・佐藤生実は「断片的な音楽聴取」として説明している（円堂 2013; 南田 2014; 宮入・佐藤 2011）。

よって、本章をまとめると、日本ではグループ・サウンズブームをきっかけにロック音楽が認知され始め、大学闘争や反戦運動と結びつくことで、ロック音楽が若者の異議申し立て、対抗文化としての機能を持つようになった。しかし、その流れも長くは続かず、対抗文化としての役割を終えることになる。その後、流行はさまざまなジャンルに移り変わるが、ロックの名のもとに収斂することはなく、〈場〉が形成されるには至らなかった。だが、1997 年フジロックフェスの開催をきっかけに音楽シーンは一変する。フェスでの規範が形成され、会場内の雰囲気を楽しむことが優先された。したがって、音楽は二次的なものになったと言える。すなわち、ロック音楽は対抗文化としての役割から価値判断を伴わずノリを重視する音楽へと変貌したのである。では、そのようなロック音楽を好む人々に共通する特徴はあるのだろうか。次章では欧米の研究をもとに、ロック音楽のファン層

について概括する。

4 欧米の文献から見るロック音楽のファン層

日本におけるロック音楽の研究は、文化社会学の一端として発展してきた。研究内容は歌詞分析からフェスやライブ会場の分析まで多岐にわたる。一方でロック音楽は海外でも研究されており、ロック音楽の発祥地であるアメリカや音楽市場を席卷したビートルズ、ローリング・ストーンズの出身国であるイギリスでは、より盛んに研究が行われている。アメリカではメディアの直接的な効果を研究する経験学派の立場から、イギリスではマルクス主義的アプローチによる批判学派の立場からそれぞれに発展してきた（南田・辻編 2008）。したがって、本章では欧米の研究に焦点を当て、社会心理学分野の観点からロック音楽のファン層に見られる共通性について説明する。

海外では好きな音楽ジャンルと人々の性格との関連性について多くの研究が行われてきた。本章では主に先行研究として2点挙げるが、その前に聴取層の性格を図る指標として用いられてきたビッグ・ファイブについて言及する。ビッグ・ファイブとは開放性、誠実性、外向性、調和性、神経症傾向（もしくは情緒安定性）の5つの領域から構成される。それらの主な特徴は表2にまとめている。それぞれの領域の構成要素について簡単に説明すると、開放性は知的好奇心や冒険心を、誠実性は勤勉性や良心性を表す次元である。また、外向性は友好性や自己主張性を、調和性は優しさや同情を表す次元である。なお、神経症傾向は感情の不安定性や傷つきやすさを表す次元である（小塩 2014）。

表2 ビッグ・ファイブの特徴

開放性	高い	創造的。想像力豊か。抽象的な思考をする。好奇心が強い。芸術や美術に理解がある。
	低い	型にはまりがち。具体的な思考。伝統を重んじる。未知のことへの興味が少ない。
誠実性	高い	頼りがいがある。勤勉で仕事に集中する。計画性がある。隙がない。効率性を重視。
	低い	だらしない。遅刻しがち。不注意。衝動的。
外向性	高い	よく話す。精力的。情熱的。自己主張が強い。人と付き合うのが好き。社交的。
	低い	よそよそしい。無口。引っ込み思案。
調和性	高い	優しい。寛大。面倒見が良い。思いやりがある。人を信じやすい。人の気持ちを察する。
	低い	ケンカ腰。他者を批判しがち。冷淡。ぶっきらぼう。人のあら探しをする。とげとげしい。
神経症傾向	高い	不安が強い。すぐにイライラする。動揺しやすい。心配しがち。感情の変化が大きい。
	低い	落ち着いている。リラックスする傾向。ストレスに上手く対応する。穏やかな気分。

出典：小塩（2014）をもとに作成

これら5つの因子に独自の尺度を施した上で用いたのが Adrian North である。Adrian North はヨーロッパを中心とした36,518人分のデータから音楽選好と人々の性格との関連性について調査した（North 2010）。調査内容はインターネットを使ったアンケート調査である。この調査における目的は2点あり、第1に音楽と性格との関連性についてである。第2に音楽と他因子との関連性についてである。そのため、アンケート調査にはビッグ・ファイブをもとにした性格を測る項目の他に年齢、性別、収入、自尊心を測る項目が付け加えられ、相関が分析された。その結果、それぞれの好きな音楽ジャンルは、個々のさま

ざまな変数や少なくとも1つの性格の変数から予測できることがわかり、音楽選好と性格には一定の関連性があることがわかった (North 2010)。ただし、年齢、性別、収入の方が性格因子よりも相関が高かったため、音楽選好と性格の関連性はそれら3つの因子と比べて弱いものであると言える。この調査において最も面白い点は、クラシックとヘビーメタルの聴取層における共通性である。どちらもクリエイティブで穏やかであるが社交的ではないことがわかった (BBC NEWS 2008; 第8段落)。ヘビーメタルといえば一般的に暗くて危険なイメージがあるが、とても繊細なものであることがわかった。また、ロック音楽に関しても同様のことが言える。ロック音楽といえば反骨心や反逆といった否定的なイメージで語られることが多い。だが、「自尊心が低く、社交的ではないが穏やかである」ことがわかった。このため、従来のロック音楽に対するイメージとは全く異なると言える。これは、「反逆的な音楽とリズムカルで激しいカテゴリーに属する音楽は否定的な性格の持ち主である」と分析した George et al (2007) と「ロックファンは必ずしも反逆的とは言えない」と分析した Zweigenhaft (2008) の分析結果を支持する結果と言える (North 2010)。

その一方で、このような研究を踏まえて日本における音楽選好と性格の関連性について分析したのが R.A.Brown である。R.A.Brown は音楽選好と性格に関する研究において、アメリカのテキサス州の大学生を対象とした Rentfrow and Gosling (2003) の調査結果と南東部の大学生を対象とした Zweigenhaft (2008) の調査結果が同じアメリカ国内であるにもかかわらず少し異なっていたことから、調査結果を日本に適用することに対して疑問を持った (Brown 2012)。そこで、日本の大学生 268 人を対象にアンケート調査を行い、関連を調査した。その結果、音楽選好と性格との関連性が日本においても見られた。ただし、関連性が見られたのは、クラシック、ジャズ、オペラといった Reflective (黙想的) 音楽と開放性、およびポップ音楽と社交性 (外向性的一种) においてのみであり、他の音楽ジャンルと性格との関連性はほとんど発見できなかった (Brown 2012)。ただ Reflective 音楽と開放性の関連性について言えば、アメリカ、カナダ、オランダ、ドイツ、ブラジルで行われてきた既存の研究と一致している (Brown 2012)。R.A.Brown は、多少の相違点はあるものの、日本においても各国で行われてきた研究と非常に似た結果が得られたため、社会の違いが異なる音楽の趣向を生むわけではないと結論づけている (Brown 2012)。

よって、North と R.A.Brown による研究をまとめると、日本においてもロック音楽の聴取者は「自尊心が低く、社交的ではないが穏やかである」と予測されうる。だが、ロック音楽に対する音楽選好と性格との関連は日本では見られていない上、いずれの研究においても音楽ジャンルと性格の相関は低いいため、これらの関連性は弱いことがわかる。さらに、性格を測るために使われているモデルは研究によって異なっていて、研究結果を一般化することは難しい (Brown 2012)。このことは、統計上の数値と実態は異なる可能性があるとして North も指摘しており、より詳細な調査が必要であると考えられる (North 2010)。そこで、次章ではロックファンに見られる特徴と音楽の受容について、性格の形成に影響を与えているであろう学校生活との関連においてインタビュー調査を実施し、その結果をまとめる。

5 インタビュー調査

これまでの先行研究から、ロック音楽の役割の変化とそれに伴う聴取構造の変化を確認することができた。だが、音楽選好と性格との関連性が低かったことからロックファンに見られる共通性を特定するまでには至らなかった。したがって、本稿では精細な情報を得ることができるインタビュー調査を行い、その結果を分析する。

5.1 調査概要

本稿の目的は、ロック音楽を聴くファンにはどのような人が多いのか、さらには彼らが音楽から何を得ているのかを明らかにすることである。調査方法はインタビューであり、半構造化インタビューの形式を採用している。質問項目は次の通りである。

- (1) ロック音楽にはまったきっかけは何ですか
- (2) どんな時に音楽を聴きますか
- (3) 音楽を聴く目的は何ですか
- (4) 学校におけるクラスでの立ち位置はどうでしたか
- (5) ライブに行く目的、魅力は何ですか
- (6) 学校生活において悩みはありましたか
- (7) 自分の性格についてどのように捉えていますか

半構造化インタビューなので質問の順番や話の容量には差異があるが、概ねこれらの質問項目を外すことのないようにインタビューしている。調査は6月10日から11月4日まで行われ、カフェや学校でお話を伺った。インフォーマントは9名である。詳しくは表3にまとめている。なお、DとEは本人たちの希望により2人同時にインタビューを行っている。

表3 インフォーマントの情報

	年齢	職業	実施日	時間
Aさん	22歳	大学生	6月10日	1時間30分
Bさん	22歳	社会人	6月15日	1時間40分
Cさん	24歳	社会人	7月20日	3時間16分
Dさん	17歳	高校生	7月25日	48分
Eさん	17歳	高校生	7月25日	48分
Fさん	22歳	大学生	10月29日	47分
Gさん	23歳	大学生	11月4日	41分
Hさん	23歳	社会人	7月14日	53分
Iさん	23歳	大学生	8月16日	42分

大別すれば、ロックをこよなく愛する人たち（A～G）とロックとは関わりがなく音楽自体にあまり興味がない人たち（H～I）に分けられる。ただし、Fはロックを聴くものの他

けど、もう考えてしまうしってというのがもう、それで（職場で）指示出しとかしないかんってなった時にめっちゃ段取りとかで時間を考えるようになったりとか、あの子がこれぐらいで終わるからこれぐらいにやってっていうのを考えるようになったからよりせっかちになって考えるようになっちゃって、普段のプライベートの生活でも無駄なこと考えるみたいな。ポーっとしてても何か考えてるみたいな。

高校の時に部活してた時も自分のことにも悩んでるには悩んでるけど、人のこと悩みすぎってよく言われて、人のこと悩んで人にすごい全力になりすぎるから、自分のこと考えてって周りから心配される。でもそれはただ表上（おもてじょう）の話なだけで、自分の中では自分のこともう考えたくなくて現実逃避したくって、だから人のことを考えてただけなんだけど、たぶんそれが癖づいてて周りから人のことばっか考えて自分を犠牲にしてまでも人のことを考えてるって言われてて、だからその子とケンカになっても自分が絶対悪くなくても自分が謝っとけばここは収まるからとか、ちょっと1歩下がったような（笑）高校の頃からちょっと変なところがあって、それですーっと、そういうところはたぶん昔からの性格。すごい人間不信で人とあんまり関わりたくないみたいなタイプで、だから友達もそんな表面的にしとか付き合わへんから少ないみたいなやり方で生きてきた。

(Eさん) まあ何かもう自分からは行けない。人見知りはまだありますかね。1回喋ったら良いんですけど、喋るまでが長いといますか。話しかけられた方がいいんですよ。他はまあ、もうちょっと自分に自信が持てたらいいなと思う。決断力がないというか、どっちかっていったら引張られていく方がいいような気がします。もうちょっと決断力あった方がいいかなあって。どこ行こうとか言われても任せるよとかそういうのが多いんで自分がこうパッと言えるようになったらいいかなあって思います。

このように、ロックファンは自身の性格を否定的に捉えるため自尊心が低く、主体的に行動することに対して消極的である。さらには、他者の目に非常に敏感である。それは、以下のインタビューからも洞察できる。

(Aさん) (「大人数苦手?」) うん。話すタイミングがわからんくって。聞くだけになる最後。いっぱいいるとあっちの話も聞いてこっちの話も聞いて、今私なんか言う時かなとか思ってたらいつの間にか違う子が話してるみたいな。すごい人いると私どう映るんかなあとか思っちゃって。比

較されんのが嫌なんかもしれへんけど。

(Bさん) 普段は別に気にならへんけど、喋ってる時に自分がこの話をしてて相手がどう考えてるのがめっちゃ気になるタイプ。こういう行動したら相手どう思うねんやろとか。めっちゃ考えて行動しちゃう。「仲良い人に対しても考えるの?」考える考える。ご飯決める時とかで考える。ここ勸めてるけどほんまに良いて思ってるのかとか、めっちゃ考える。

(Cさん) 結構うちズバズバツと言っちゃうからみんな来てくれないのかなって思ったからとりあえずパーって女の子の話聞いた時に今この子はこれに対してどう言ってほしいんだろうかっていうのをすごい考える。だからその頃は思ったことをバーツて言い過ぎちゃうから、直接で話すのが苦手だったから、ちょっと直接は無理だけどメールとかでだったらしてきていいよって言ってメールで相談してきてくれます、この子はこう思ってるからバーツて書くっていうのを、たぶんこの言葉がこの子には引っかかるからこれは推敲してみたいな、ずっとバーツて考えてずーっと何時間もその文考えて、ポンと返してみたいなのをやってたから、だから今それが身についた。今この子はこういう性格だからどう考えてるか、こう返してあげたら喜ぶとか、いちばん気持ち、心に響くかなとか。

(Eさん) (言いたいことを) ちょっと抑えがちですかね。言えるようになったらもっといいよなあ。

このように他者の視線に敏感なことがわかる。それゆえに消極的な性格は、学校生活におけるある共通の経験に由来する。それは対人関係における疎外の経験である。以下は、学校生活における自分の立ち位置や学校での様子についての発言である。

(Aさん) 賢い人は多かったですけど、やっぱりちょっと二極化してたというか、すごいめっちゃわーって騒ぐ人と全然騒がへん人とみたいなの。真ん中の人がいーひんみたいなの感じで。私は全然おとなしい方で。静かに、静かにしてる。(真ん中の人に対して) あんまりこっちに害がなければどうぞみたいなの(笑) からんでこられなければどうぞ騒いでくださいって感じ。(行事について) もう言われてからでいいかなあとかなる。あんまり自分からはちょっと…みたいなの。自分からはなあと思って。「あれやってくれへん?」って言われたら「ああやりますやりますー」って感じで。

(Bさん) バンド組んでたやんか、バンド組んでたメンバーとずっと遊んだりはしてんねんけど、高校の時ってずっと女子高やから、いろいろそういう女子のゴタゴタがあるわけ。で、その5人やねんけどな、5人の中でもこの子嫌やとかあったわけ。だからなあと思って、そんな（言いたいことを）言わへんかなあ。だからかわからへんけど。漏れそうやしそんなにめっちゃくちゃ信頼まではしてない。普通に仲は良いけど。こそこそ言うタイプ。だからいらん。

楽しかったんは楽しかったけど、そんなになあ。（「信頼できるっていう感じではなかった？」）うん。苦手やった。体育の先生が、女の子ばっかやからさ、そういう人ってさ、すごい好きになったりするやん、体育の先生とかって。その1人持ってくれてた、そのクラスを持ってくれてた体育の先生がいて、高3ぐらいから結構仲良くなって、CDの貸し借りをよくしててんな。で、授業とかもよく当てられるようになったりとか、それを見た好きやった子らは、なんなんあの子みたいな、ちょっとしたことがその子らには、なんなんあの2人みたいな。文化祭の時とかも中庭でイベントとかがあって、そこに椅子が並んで。で、まったりして見てんねんけど、何人かで見えてん。そしたら体育の男の先生が私の隣に座ってきてん。めっちゃ近くで話してたら、その後ろで見てたらしくて、だからあたしがいーひとところにつきあってんのみたいな。ほんまにありえへんみたいな…ことを言いだしたり、3人いて、体育の先生が。で、今仲良い先生ともうあと2人いんねんけど、そのもう1人の先生に文化祭の、バンドで出た時にビデオを録ってほしくて、その場にその先生がいたから、録ってくださいって頼んだら、それをライブ終わってありがとうございましたって言って笑ってるのをその子らが見て、なんであの先生とも仲良いの。いや、頼んだだけやん、そこにいたから（笑）で、言われて卒業までずっと。ずっと言われる。

(Cさん) 地味に静かにしながらもちゃんと意見を言うみたいな（笑）なのになぜかそれが先生にばれて、先生が好きで、先生っていう存在が。だから先生にすごいこうこうこうでこう思うんです、で、これがこうしたいんですっていうのを言っちゃうから先生があの子しっかりしてるって思うから、先生がじゃああなたこれやってみたいな感じで言われて運動会みたいなやつリーダーみたいなやらされたりとか。いや合っていないから私の性格にと思いつつもすかさず選ばれるよねーって思いながらやってたことはある。きっちり仕事はやるけど、その盛り上げるとかノリとかが苦手ですごく。だから中学生の頃とかすっごい、なんだろう、ノリがすごく悪くってプライドが高すぎるっていうか、

恥ずかしいことが多すぎてちゃんとしてないところ見られるのが気に入らんみたいな感じがあって。むっちゃノリ悪くって、すごい固まった中に入ってるみたいな感じやったけど、そんなんだった。自分にフィルターしてるみたいな感じやって、だからすごいめっちゃクールで壁感じるみたいな。中学3年生の時に自然と1人になってしまって、周りに話しかけても上手く話せへんしみたいな。要はまあいじめじゃないけどもう1人になってしまったみたいな感じで、もう全然学校楽しくないし誰とも喋らんしみたいな、クラスに馴染めなくて1年間過ごして…。

(Eさん) クラスでっていうわけじゃなくて、なんかもう学年全体でって感じなんですけど、僕ら普通科と体育科みたいな感じっすよね。その体育科のやつらがちょっといきってて。ちょっと自分らが上やぞみたいな感じを出してくるんですよ。体育の方が普通科を見下してるみたいな感じが。(行事において) 全部学年合わせて競い合っていく形式なんですけど、まあでも普通科と体育科を組み合わせさせてやって、でもその時は言われますね。先輩とかにもちゃんとやってみたいな。ちゃんとやってるんですけどね。

このように、ロックファンにはいじめや孤立など対人関係における疎外の経験があることがわかった。このような経験があるからこそ他者との関係性に悩み、ストレスや不安を感じるのだろう。一方でロックに興味がない人はどのような性格でどんな学校生活を送っていたのだろうか。以下は、ロックに興味がない人の性格と学校生活についてのインタビューである。

(Hさん) 自分の性格は、あんま物怖じしてなかった気がする。中学の時はそんな人見知りもなかったし、たぶん。あったっけな、なかった気がする…し、普通に男女関係なく男の子ともしゃべるし、女の子ともしゃべるし、でも負けず嫌いやったかな。

(高校で) 1年の時副委員長して、2年生の時委員長してたわ。別に人前で喋ること…嫌ではないタイプやから。みんなそれこそ副委員長とかもサポートしてくれるし。なんかあったら普通に副委員長に聞いたりとか、友達に相談したりとかはしとったし、嫌なことはなかったかな。嫌な思い出はなかった。(「行事でも?」) ないかも。みんなそれこそクラス自体も仲良かったし、クラス替えした時も。みんなでがんばろうみたいな、スポーツデーもみんなで勝つで!みたいな。事前に練習したりとか文化祭の前とかもううちのクラスはすごい盛り上が

って、クラスでダンスとかあったから、みんな受験前やのに普通に残って、6時とか7時ぐらいまで学校で残ってみんな練習したりとか。

(Iさん) 不器用やけど自分をブレへんように1つのことに向かって、1つのことを目指してめっちゃ取り組んでいくっていうのは自分の中でずっと大事にしてて。だからそれは普通の日常生活でも意識してへんくてもそういう感じでやっていけるかなとは思ってる。

俺は、クラスの中で部活によって、部活ごとでやっぱ固まりがちになってしまってたけど。いろんな部活が5~6人ずつクラスの中に入れて、まあバスケット部はバスケット部で、まあ一緒にいる時間が長くなったり、クラスの中でも。体操部は体操部やったりしてたけど、俺は野球部だけじゃなくてもう関係なくどこの部活とも関わるようにはしてた。「対人関係で悩みは？」対人は高校時代はなかったかな。満足やったから。

このようにロックに興味がない人は、自身を肯定的に捉え、対人関係における悩みはなかった。また、他者の視線を気にする様子もなく主体的に行動できることがわかった。よって、ロックファンと興味がない人を比較すると、ロックファンには対人関係における疎外の経験から周囲の反応に敏感で自尊心が低いことがわかる。また、その経験ゆえに消極的な性格の持ち主が多いことがわかる。しかし、本当にそのように言えるだろうか。そこで、反証としてロックをよく聴くが対人関係に悩みはないと答えたF、Gのインタビューを挙げる。2人のインタビュー内容は以下の通りである。

(Fさん) 隅っこにいるような感じではあったけど、なんか本当にうちの行った高校は雰囲気は良くって、いじめとかも正直ほぼなかったと思うし、クラス全体がほぼ良い雰囲気だったから。満足だと思う。5段階評価で言うと4くらい。

(Gさん) (中学生の時は) まあ端の方でボソボソと友達と喋ってたと思うけど(笑) 高校の時は弓道部ぐらいしか友達おらんかったからクラスではそんなに喋ることもなく過ごしてたけど。別に話合へんとかなんかな、何ていうんやろうな、話したくないとかそういう感じで話さへんかったわけではなく、ほんまに用事がないとか(笑) 話す用事がないから特に話さへんかったみたいな感じかな。別に周りが嫌いとかじゃないんやけど…。まあ友達少ないなあとは思ってたけど、別にそれが不満とかいうわけではなかったかな。

このように学校生活に対する不満はないことがわかる。だが、話を進めていくとFには中学生の時にいじめられた過去があった。

(Fさん) 中学校の時はね、ほんとに3年生の時かな…にマジで部活でいじめみたいなのに遭っちゃって。そのバド部の中に1人めっちゃ癖の強い子がいてすぐキレルし、キレたらバドミントンのラケット投げるしみたいな、すごい怖い子がいて。まあ普段は仲良かったんだけど、その子とちょっと仲悪くなっちゃって、そしたら部活のメンバー全員から無視されるようになって。それがいちばん悩みでほんとにもう部活が嫌すぎて家で泣いたりして、もう行きたくないみたいな、でも行かなきゃみたいな感じでひたすら悩んでた時期はあったね。

そして、その経験は性格においても一定の影響を与えている。

私は内向的、ほんとに。外向的ではない。自分で言うのもあれだけど、一応真面目ではあると思うんだよ。でもかなりマイナス思考だから、なんか問題が起きると全部自分の能力不足だって思っちゃう。正直他の人が悪いって思う時もあるけど、でもまあそうさせた自分も悪いなあみたいな。

このように、高校生活においては満足感があったのに対し、中学生活では疎外の経験があり、やはり他のロックファンと同様にそのことが消極的な性格に影響を与えていると言える。一方でGは学校生活と自身の性格についてこのようにも発言している。

(Gさん) 馴染めてないなあとは思ったけど、まあでも別にまあええかみたいな(笑)別に弓道部に友達はおるし、まあ特に不自由してるわけじゃないしまあええかみたいな感じで。

まあ大人しい方ではあると思うけどなあ。大人しくて融通がきかん感じかなと思うけど。わりと頑固やと思うけど。他の音楽聴かへんっていうところでも頑固やなと思うし、あとは部活とかやっても結構自分のやり方でやりたいみたいな。わりと人から指導とかされても自分がそれはそうやなと思ったらやるし、そうやなと思わなかったらまあ聞き流すみたいな感じのところは結構あるから。結構頭は固いと思うけど。

これらの発言から推察すると、対人関係については最低限の満足感であり、悩みの種にはなっていないものの馴染めていないという思いから生じた疎外の経験があり、対人関係が良好であったとは言い難い。このように、F、Gについても対人関係に悩みはないとしながら疎外の経験があり、そのことが自尊心の低さや消極的な性格に結びついていると言える。

したがって、ロックファンは自尊心の低さゆえに消極的であることが多く、その性格は学校生活における対人関係の疎外に由来する。また、この経験から言えばロック音楽は、対人関係の輪から締め出された下層者のための音楽とも言える。ただし、下層者としての認識が本人にあるとは限らないし、それが他者との間で一致しているとも限らない。なぜなら、Bはクラス内での順位付けや位置づけはあまり存在しなかったと答えているからである。また、Eについても同様である。筆者から見れば普通科よりも体育科の方が上位に位置しているように見えるが、Eはその構図に対して「うっとおしくてしかたがない」と答えているので、自らが体育科と比較して下位に位置しているとは思っていないことが窺える。だが、このような経験が自尊心の低さや消極的な気質に影響を与えていることは明白だろう。

(2) ロックファンによる音楽の受容

前項において、ロックファンには自尊心が低く消極的な性格の人が多くことがわかった。では、このような性格を持つロックファンは音楽によって何を得ているのだろうか。調査の結果明らかになったことが3点ある。第1に、学校生活における不満の解消である。第2に、落ち込みの軽減と心の安寧である。第3に、積極的な行動力である。以下は、どんな時に音楽を聴くかという質問に対する回答とそれにまつわるエピソードである。

(Dさん) 友達でまあそれちゃうなあってむかついた時、イラッてきた時とかはまあ音楽で解消みたいなのはあります。

学校の校外学習みたいなやつで決まったところに行くみたいな。それで班ごとに決まったところに行くみたいな感じなんですけど、大体その班でまあそこ行くかみたいな話が決まりつつある時に1人だけ別のところむっちゃ推してくるみたいな。周りの空気読んでないやつがおって、しかもそいつがまあまあ発言力あるしもう1回また話スタートに戻って決まらんっていう。今はちゃうやろみたいな、それが先生適当って言ったじゃないですか。それでだから班が行くとこ決まったところから帰れるみたいな、そんな時に限ってそういうことを言うみたいなやつがおる。それはめっちゃイライラして、バス行ってもうたやんけみたいな(笑)それはありますね。

Dは学校生活における対人関係に対する不満、イライラを解消するために音楽を聴いていることがわかった。反逆や反骨心のイメージがあるロック音楽の聴き方として想像に難くない。一方で、次のような目的における聴取も多かった。

(Aさん) 実習もあって、もうまた先生に言われてみたいな、自分できひんしみたいな。いろんな葛藤した時に。私、土日とかにまとめてその記録物とかをやりたい人なんで、平日で「なんでやってこないの？」って言われると、土日にやるって思ってるんですみたい。ほんとにもう、「そんなに言わなくてもわかってる」って思うんですけど、たぶんこう「言ってもやってこないからわかってない」って思われてるのかなあ。看護師さんとかからもガツツリ言われます。特にその受け持ちっていうか患者さんのことよく知ってはる看護師さんやったらそういうのすぐ、めっちゃ知ってはるんで「それ必要？」みたいなの言われると「必要とおもっ、私は必要と思ったんですけど」みたいな感じで。反応できなくなって。強くは全然言えない。

おうち帰って、音楽聴いて、ちょっとスッキリしてから今日の課題というか今日の記録を「しゃあないやるか」って音楽聴きながら。やっぱり実習の時とかちょっと落ち込んだ時にちょっと盛り上がる曲聴いてなんとかちょっと盛り上がる方に持っていきたいなあって思う時もあるし。

(Bさん) (先生と仲が良かったことについて)「あの子めっちゃ狙ってるんじゃない？」超言われた。後半になってくるとさ、授業とかで私が当てられた時の視線よね。井上さん(仮名)って呼ぶねんけど、井上が2人いて。で、井上さんって呼ばれて、どっちか言わへん時があって、忘れてはって。クラスの子が「どっちですかーBの方ですか」みたい。

気分落ちた時はしっとり系を聴く。寄り添ってほしいねん。(「そういう時に聴く曲は決まってる?」) 白昼夢とか。めっちゃしっとり系。はっきり覚えてないけど「悲しい歌だけじゃなく悲しみに立ち向かえる歌を」っていう歌詞がある。絶対聴く。

Cは高校生の時バレー部のキャプテンだった。そのことを踏まえてのエピソードである。

(Cさん) うちのそん時のやり方として先輩と後輩って思ったこと言い合えないし、敬語だと自分が思ってることをストレートに伝わってこないじゃ

ないですか。だから後輩に敬語使わなくても怒らんかったっていうか、もういいよそれでみたいな。自分の中ではやり方は合ってたんだけど、そのせいで先輩が後輩になめられるみたいな立場になってしまって、だからお前のそのやり方が悪いって言われた時もある。でも進学校やしみんなそんなに本気で部活やってなくて。とかで結構難しくって、本気でやりたいのに本気じゃない人が多いとか、求められてることに全員が一緒な方向向けへんとかっていうのもあったりとか、でも普段はズバズバ言ってるのにそういうことだけすごい言えないみたいな性格だから、みんな C だから言えるでしょとかよく言われるけど、や、それはちょっと言えへんみたいなとかはよくあって、とかでだいぶ悩んだかな。1回キャプテン降ろされたりとか。

たぶん現実逃避の時間としてはあったはず。やっぱ声聞いたら癒されるから、普段結構音小さめで聴くけどたまにボリューム上げてひたすら聴いたりとか。だっていつも聴いてる音聴いたらやっぱ自然と落ち着くからそのまま眠りにつける。ほんとはつけたまま寝るのはだめなんだけど、それぐらい好きだから聴いてられるしっていうのもあったし、聴いてたかもしれないなあ。

このように対人関係で悩み落ち込んだ末、その落ち込みを和らげるものとして音楽を聴くことが多かった。反逆のイメージとは真逆であり、音楽を自分に寄り添ってくれるものとして肯定的に受け止めている。このように、ロックファンは音楽を不満の消化のためだけではなく、落ち込みに寄り添い、悲しみから引き上げてくれるものとして聴いている。一方で、Fのように落ち込む時にはロック音楽を聴かないという意見もある。

(Fさん) 落ち込んでる時は、基本的にロックの曲は落ち込んでる曲ってそんなにならぬから、どっちかっていうと理不尽な社会だけでも俺は自分を貫いていってやるぜとかそういう感じじゃん。それは頑張りたい時に聴くから落ち込んでる時には聴かない。ポジティブ思考になりたい時とか今後ちょっと頑張らなきゃなっていうひと踏ん張りする時にテンション上げるために聴くのがロック。心がまだ強気を保てる時じゃないとロックは聴けないことが多い。

このような違いが生じる要因について分析すると、アーティストに対する共感の有無であることがわかった。以下は、同じアーティストのファンであるにもかかわらず意見を異にするBとFのインタビュー内容である。

(Fさん) アーティスト本人にあんまり興味がなくて、曲とかその人の声の質とかが好きだから CD で十分足りちゃうみたいな (笑) 正直周りが理不尽でも自分貫こうって、まあ憧れるけどできないタイプだから、落ち込んでる時にそれを聴いてもまあ綺麗事なんだよなとか思っちゃったりするのね。

(Bさん) (ボーカルは) 憧れの人。こういう人になりたいみたいな。自分の夢を叶えて自分のしたいようにして…やれるのがいちばん最高やんか。それをしてるから。信念とかを曲げへんからめっちゃダサイ曲とかも作るし。ダサイ曲を作るのが好きやから。

このようにアーティストに対する共感性が全く異なることがわかる。また、落ち込んだ時にロック音楽を聴くと答えた A や C においても B と同様にアーティストへの共感が見られた。

(Aさん) たまにサイトとかでブログとか書いてはるやないですか。その時に結構いろんな人の住んでるなるべく地元に行きたいみたいなのを言ってくれはるんが、すごい嬉しいなあみたいな。東京に来い！みたいな感じじゃなくて俺たちが行ってやるみたいな。行ってやるわみたいな感じがどうぞ来てくださいみたいな感じで、嬉しいし。アルバム発売するきっかけとかで雑誌載らったりするからちょっとようけインタビューとか写真とか載ってたら買おうかなあみたいな。どういう思いで作らしたんかなあみたいな話してはったら嬉しいし。どうやって作らしたんかなあって思って。

(Cさん) 音と声が好きだったみたいな思って、これって決めたアーティストはこの曲あんま好きじゃないなって思ってたやつも絶対好きになるって言ってたのもそれやし、根本的などが好きだから、その人の、そのアーティストの曲やったら何聴いてもやっぱ癒されるみたいなのがあって。で、やっぱそれが好きやからライブは絶対みたいな感じに繋がっていくというか。

このように、ロック音楽を、落ち込みを和らげ安らぎを与えてくれるものとして捉えるには、アーティストに対する理解と共感が必要であることがわかった。さらに、前述したように、F はロックを聴くものの他ジャンルの音楽に愛情を注いでいるインフォーマントである。このことを鑑みれば、ロックに対する捉え方の差異は指向の差異にもつながると

考察できる。また、南田によれば、ロックとは「旧来の正統文化とは対抗的な下方向への誘致」を働きかけるものであった（南田 1998）。現に、1980年代にはステージに汚物やペンキがまき散らされていることもあったし、客席に跳び込んだアーティストに対して客が殴りかかることもあったという（南田 2001）。そのような時代において、パフォーマンスは劣悪を極めており、本来なら非難されるべき行為に価値が置かれていた。しかし、今回のインタビュー調査によって明らかになったのは、正統文化内での上方向への誘致である。以下は、B と G のインタビュー内容である。

(B さん) 現実ばっか見ても夢は追えないみたいな…感じのことを言う。聞いてなあ、そういうの思うよね。夢の話はめっちゃする。夢は口に出さないとかかわないとか。ライブハウスでずーっと昔やってた時に、メジャーしてなくて、UVERworld がそんなアリーナとかドームとかに何万人集めてできるわけないみたいな。批評とかいろんなお偉いさんとかに言われてたからいやいやここまでやったぞみたいな。

LIFESIZE っていう曲の「与えられたものなんかじゃ何も得られない」っていう歌詞が好き。あれは私の座右の銘です（笑）聴いてた時がめっちゃ歌とかに煮詰まっていた時で。全然もっと昔に出てる曲やけど…大学入って。1 回生の時ぐらいかな…とかに結構聴いてなんかずーんときた、心に。沁みた。「ああなんかやっぱり自分からどどんいかなあかんねんなあ」って思ったりした。「なんか言われたことだけやっててもあかんねんなあ」と思ったりした。（「それは先生に何か言われたとか？」）うん。「できてるんだけど、なんかあまり成長しないわね」って言われた（笑）そのあとから毎日練習するようになった。毎日練習室で…。なんか授業とかある日は別にいいやって思ってた。授業でやるし。思ってたけど…残るようになったかな。授業終わってバイトまでの時間をちょっと長めにとってやったりとか。お昼休みとかもお弁当練習室で食べて…。

(G さん) 試合の前とかは…F・E・A・R。あとなんかここからサビやねんけど、「ちっちゃくプルプル震えるくらいなら暴れろよ」とか。あがりやから、緊張しいやから、だから緊張したらこう動きとかがどうしても小さくなるねんけど、そういうのを怖くてちっちゃくなってとかじゃなくて、こうバーツとでっかく大きく動こうみたいな感じでこれを聴いてる。

(「パーフェクト・ライフ?」) そう。これは C メロがいちばん好きやねんけど…ああこっから「完璧に見える人もみな見えないところで青筋立てて苦しんでる」「何かに向かい手を伸ばしながらいっているその姿 そ

れこそが「パーフェクトなライフ」っていう。努力することが大事みたいな。

このように、不遇の時代を経て成功を収めたアーティストの姿や努力の大切さを説いた歌詞に共感し、消極的であるはずの彼らが主体的に行動を起こしていることがわかった。彼らの発言から見出されるのは所属集団からの逸脱ではなく、所属集団における正統性の獲得である。よって、正統文化内での上方向への誘致と言える。ただし、彼らが共感するのは、あくまで成功しないというレッテルを貼られながらも成功を収めるに至った苦労や努力にある。下層者という位置づけからの逆転であって、けっして上位者による成功ではない。ロックが「持たざるものの武器」であるからこそ、下層であるという位置づけが重要であると言える。

以上、本項をまとめると、ロックファンは音楽によって対人関係における不満を解消するのみならず、落ち込みを軽減させ心の安寧を得ていた。ただし、それにはアーティストに対する理解と共感が必要である。インフォーマントは、アーティストの境遇や彼らが書く歌詞に共感している。それは売れ線から除外された悲境やうまくいかない現実に対する艱難である。彼らはそのような部分に共鳴するからこそ、対人関係における疎外の経験によって生じた失意や孤独感を払拭し、主体的に物事に取り組むことができるようになるのである。

6 おわりに

本稿は、若者におけるロック音楽の役割をテーマに、ロックファンに見られる共通性とロック音楽の受容について学校生活との関連から調査した研究である。その結果、明らかになったことが2点ある。第1に、ロックファンに見られる共通性である。学校生活における対人関係での疎外の経験から、周囲の視線に敏感で自尊心が低く、消極的な性格の持ち主が多いことがわかった。この結果は Adrian North の「ロックファンは自尊心が低い」という分析結果を支持することにもつながる (North 2010)。また、R.A.Brown による調査では日本におけるロック音楽と性格との関連性は見られなかったが、本調査によって限定的ではあるものの、その関連性が明らかになったと言える (Brown 2012)。第2に、ロック音楽の受容である。ロックファンにとってロック音楽は、学校での対人関係における不満を解消するのみならず、疎外の経験によって生じた落ち込みを和らげ、心の安寧を得るためのものであることがわかった。ただし、そのためにはアーティストに対する理解と共感が必要である。境遇や歌詞に対する共感があるからこそ気落ちを軽減でき、主体的な行動が可能となるのである。

このように、ファンにとってロック音楽とは、失われた積極性を取り戻すための音楽である。大関によれば、現代はソーシャルメディアの普及により「いま/ここ」にいる自分に対する承認、共感を求める時代である (大関 2017)。このことを考慮すれば、学校生活における疎外の経験により承認や共感を得られない彼らが音楽によって消極性を乗り越えよ

うとする傾向は、「いま/ここ」にいる自分を認めることにつながるのかもしれない。それはまさしく、前述した「正統文化内における上方向への誘致」に対する動機にもなると考えられる。

以上、本稿はロック音楽と学校生活との関連において述べてきた。だが、本調査では明らかにできなかったこともある。それは下層という位置づけに対する明確な基準である。本稿では、疎外の感覚や経験を以て位置づけに対する基準としたが、学校だけでもクラスと部活、主に2つの所属集団が存在し、どの集団を採用するかによってインフォーマントの位置づけが変わる可能性がある。また、集団ごとに価値基準も異なると考えられる。現にAのインタビューでは、クラス内にはロックファンが多く、Aから見て上位に位置するような、いわゆるクラスの中心人物についてもロック音楽を聴いていたことが明らかになっている。しかし、そのような人々にまで調査を広げることができなかったため、彼らが疎外の経験を持っていたかどうかは不明である。そのため、分析範囲に含めることができなかった。また、第5章においても述べたことではあるが、下層者としての認識における差異も考えられる。同様に、Aのインタビュー内容について言えば、Aから見てクラスの上位に位置するような人物であっても、彼らからしてみれば下層という認識であるのかもしれない。したがって、分析に採用する集団やその集団における価値基準を調査し、自己と他者の間における認識のずれを考慮した上で、位置づけを決定する必要があると考える。

いずれにしても、ロック音楽が下層者のための音楽であることに異存はない。南田は日本のロック音楽について「低級までもが模倣の対象にすぎず、ロックの〈場〉における基盤の希薄さを露呈することになった」と述べている(南田 2001)。だが、本稿で明らかになったロックファンに見られる共通性と彼らの音楽の受容を踏まえると、その基盤の希薄さにこそ現代に即した発展を促す土壌があったと言える。他者からの承認が希求される時代に対人関係において疎外された経験を持つインフォーマントたちにとって、ロック音楽はまさしく希望であった。ただ、CDの売り上げが減少し、ストリーミング配信サービス³⁾が提供され始めた時代である。いつかは、音楽がただ消費されるだけの時代もやって来るのかもしれない。だからこそ、彼らにとって音楽が希望であり続けること、そしてロック音楽の魅力が少しでも伝わりますようにとの願いを込めて本稿を締めくくりたいと思う。どうか、音楽が素敵なものであり続けますように。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、協力してくださった方々に心より深くお礼申し上げます。特にインタビューを引き受けてくださった方々には感謝してもしきれません。本稿では紹介できなかったお話も含めて、大切な思い出や気持ちを共有させていただける喜びとともにお話を聞いていました。たとえお話の行きつく先が悲しみや苦しみであったとしても、その方を彩る一部分であることを学ぶことができました。このような形ではありますが、頂いた気持ちを少しでもお返しできていれば幸いです。ありがとうございました。

[注]

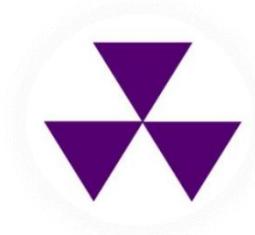
- (1) 広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境や学校教育を通して各個人に蓄積された知識・教養・技能・趣味・感性など（身体化された文化資本）、書物・絵画・道具・機械のように、物質として所有可能な文化的財物（客体化された文化資本）、学校制度やさまざまな試験によって賦与された学歴・資格など（制度化された文化資本）の3種類に分けられる（Bourdieu 1979=1990）。
- (2) 人が日常生活のあらゆる領域において普段行っているさまざまな行動。政治・宗教活動のような意識的実践から食事、会話、趣味、スポーツ、さらには立ち居振る舞いまで、およそ日ごろ習慣的に行われていることのほとんどすべてを包括する概念（Bourdieu 1979=1990）。
- (3) 定額の料金を支払ってスマートフォンやパソコンなどで音楽が聴き放題になるサービスのこと。

[文献]

- BBC NEWS,2008,"Music tastes link to personality,"BBC NEWS,London:BBC NEWS,(Retrieved December 7, 2018, <http://news.bbc.co.uk/2/hi/7598549.stm>).
- Bourdieu, P., 1979,*La distinction : critique sociale du jugement*,Paris:Editions de Minuit. (= 1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン：社会的判断力批判 I』藤原書店.)
- Brown,R.A.,2012,"Music preferences and personality among Japanese university students," *International Journal of Psychology*,47(4),(Retrieved November 5,2018, <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/22248342>).
- 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也, 2009,『パーソナリティ心理学——人間科学、自然科学、社会科学のクロスロード』有斐閣.
- 円堂都司昭, 2013,『ソーシャル化する音楽「聴取」から「遊び」へ』青土社.
- George,D.M.,Stickle,K.,Rachid,F.,&Wopnford,A.,2007,"The association between types of music enjoyed and cognitive, behavioral, and personality factors of those who listen,"*Psychomusicology*,19:32-56.
- 東谷護, 2016,『マス・メディア時代のポピュラー音楽を読み解く』勁草書房.
- 広田寛治, 2003,『ロック・クロニクル 1952-2002——現代史のなかのロックンロール』河出書房新社.
- 和泉浩, 2003,『近代音楽のパラドクス——マックス・ウェーバー『音楽社会学』と音楽の合理化』ハーベスト社.
- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美, 2016,『質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学』有斐閣.
- 小塩真司, 2014,『Progress&Application パーソナリティ心理学』サイエンス社.
- 古荘純一, 2009,『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか——児童精神科医の現場報告』光文社.
- 厚生労働省, 2018,『「非正規雇用」の現状と課題』, 厚生労働省ホームページ, (2018年12月8日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/000179034.pdf>).
- Kvale,S.,2007,*Doing interviews*, Los Angeles : SAGE. (=2016, 能智正博・徳田治子訳『質的

- 研究のための「インター・ビュー」』新曜社.)
- 見田宗介・上野千鶴子・内田隆三・佐藤健二・吉見俊哉・大澤真幸編, 2014, 『縮刷版 社会学文献事典』弘文堂, 186-187.
- 南田勝也, 1998, 「ロック音楽文化の構造分析」『社会学評論』49(4):568-583.
- , 2001, 『ロックミュージックの社会学』青弓社.
- , 2014, 『オルタナティブロックの社会学』花伝社.
- ・辻泉編, 2008, 『文化社会学の視座——のめりこむメディア文化とそこにある日常の文化』ミネルヴァ書房.
- 宮入恭平・佐藤生実, 2011, 『ライブシーンよ、どこへいく ライブカルチャーとポピュラー音楽』青弓社.
- 宮下佳孝, 2015, 「最近の正規・非正規雇用の特徴」, 統計局ホームページ, (2018年12月8日取得, <https://www.stat.go.jp/info/today/097.html>).
- 諸井克英, 2015, 『ことばの想い 音楽社会心理学への誘い』ナカニシヤ出版.
- 永井純一, 2016, 『ロックフェスの社会学——個人化社会における祝祭をめぐって』ミネルヴァ書房.
- 内閣府, 2018, 『平成30年版 子供・若者白書』日経印刷株式会社.
- North, A.C., 2010, "Individual Differences in Musical Taste," *The American Journal of Psychology*, 123(2):199-208, (Retrieved November 5, 2018, JSTOR).
- 大関雅弘編, 2017, 『現代社会学への多様な眼差し——社会学の第一歩』晃洋書房.
- 小川博司, 1988, 『音楽する社会』勁草書房.
- Rentflow, P.J., & Gosling, S.D., 2003, "The do re mi's of everyday life: The structure and personality correlates of musical preference," *Journal of Personality and Social Psychology*, 84:1236-1256.
- サカナ LOCKS!, 2018, 「『ストーリーミング配信サービス』とは?」, 未来の鍵を握る学校 SCHOOL OF LOCK!, (2018年12月6日取得, <https://www.tfm.co.jp/lock/sakana/index.php?itemid=10800&catid=27&catid=17>).
- 鈴木翔, 2012, 『教室内カースト』光文社.
- 戸ノ下達也, 2016, 『<戦後>の音楽文化』青弓社.
- 豊泉周治・鈴木宗徳・伊藤憲一・出口剛, 2014, 『<私>をひらく社会学』大月書店.
- 上野千鶴子, 2018, 『情報生産者になる』筑摩書房.
- Zweigenhaft, R.L., 2008, "A do re mi encore: A closer look at the personality correlates of music preferences," *Journal of Individual Differences*, 29:45-55.

[付録]



卒業論文のためのインタビュー調査のお願い

こんにちは。私は同志社大学社会学部、立木ゼミの学生です。この度、音楽と人々の関わり方について卒業論文を制作することになりました。そこで、ロック音楽を好きな方々にインタビューしたいと考え、調査に協力していただける方を探しています。

- 【テーマ】** 若者におけるロック音楽の役割
- 【目的】** 日常生活の中でどのように音楽を聴き、過ごしているのかを調べるため
- 【聞きたいこと】** ロック音楽にはまったきっかけは何ですか
どんな時に音楽を聴くことは多いですか など
- 【対象者】** 15歳から25歳まで
- 【期間】** 6月から8月までの間で1時間ほど
- 【場所】** 駅近くのカフェ *要相談
(ご都合をお聞かせください。)
- 【個人情報】** 特定されることはありません。取扱いおよび論文への記載においては匿名で行います。
ただしデータ比較のため、年齢、性別のみ公表させていただけたらと思います。
データは、インタビュー内容を確認していただいてから使用します。
- 【意義】** 若者がどのように音楽を聴いているのか、このことに関する文献は少なく、インタビューによって得られるデータは現状を理解するための貴重なものとなります。

調査に協力していただけると大変うれしいです。

手間がかかり面倒に思われるかもしれませんが、ぜひご協力お願いします。

立木ゼミ 社会学部社会学科 荒田 留花

*****doshisha.ac.jp

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学 今出川キャンパス